

# 草庵仏教

第120号  
(発行日)  
2000年6月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX (0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋西宮店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## mさんとの対話

先月半ば、ある会合で40才ぐらの主婦mさんから質問を受けました。mさんは仏教についてほとんどご存知ない方でした。その時の質問を手がかりに、質問された問題に焦点を当てて対話編を作ってみました。

m 煩惱が起こつたらdさんはどうしますか。  
d 何か、煩惱で困っているんですか。  
m 煩惱が起こると、それです。走つてしまふので困つて来ますか。  
d いやなかなか出来ないですね。

m じゃあどうしたらいいんですか。  
d どうしたらいいかと言われると大変難しいですが、たとえれば、自分の煩惱を煩惱と自覚すれば、多少なりともブレーキがかかるのではないでしょう。ええ、それは私にも分かります。けれども、煩惱と知っていても、どうしても煩惱に流されて行動してしまうので、何故こうなるのでしょうか。それにたいしては二・三日ご自分の人生が満たされず、常に欲求不満の感情がくすぶつて起こつた煩惱に流されやすくなるのではないかと思っています。

悩みに流されやすくなるのではないかと思っています。

d m 起こつた煩惱を自分でふくまらせてしまふ、膨張させてしまつた煩惱に自分自身をまきこまれてしまふのです。そうして煩惱の勢いに流されて行動してしまふことがあるのではないのでしょうか。

d ある人にたいして腹が立つたとき、腹が立つた時に、あの人は前にもこういうことがあつたとか、あの人はもともと意地が悪いとか、次から次ぎへと悪いイメージを重ねていって、腹立ちを増幅させてしまふのです。

そのようにして腹を立てれば立てるほど、悪感情が高ぶつてきます。火に油を次々と注ぐようなものです。自分で腹立ちを育てていくのです。しまいに始末がつかなくなると、抑えきれなくなつて荒々しい行動に出てしまふのです。だから最初に腹が立つのは止むをえないにしても、それを自分でふくらませないよう、に、最初の時点で、腹立ちの感情をできるだけ流していくようにするならば、表だつた行動をしなくてすむのでしよう。そういう悪感情をコントロールする方法はいろいろあるとは思いますが。

m どのような方法があるのでしょうか。  
d たとえば、親にたいして憎しみの感情が湧いてきた時に、一定の狭い空間に座つて、毎日何時間も、生まれてこの方両親からただだけお世話になつたかを年代順に逐一思い出してみるといふ内観療法と出るのがあります。

それを真面目に行くと、親からどれほど愛され心配をして貰つたかが知れて、(ちよつとのことと親を怨んで本当に申し訳ない)と懺悔するようになりす。

ですから、腹が立つても、こういう方法を実行して、怒りの感情を浄化する方へ向けていくなら、煩惱に突き動かされての行動へと走る前に、チェックされるのではないかと思います。

m では内観療法をすれば私の生活は煩惱に振り回されなくてすむのですか。  
d まあ、そういうことになると思いますが、けれども、なかなかこれをし通すのは難しいでしょうね。

d どうしてですか。  
m まず、内観的に自分を反省しようという冷静さは、腹立っている最中にはふつとんでしまふこともありましよう。また、毎日内観するのは根気がいらぬし、それに、マンネリ化するにもなりかねません。始めは親の恩の深さに感激しても、次第にその感激がマンネリ化して可能性があまりなくなります。

m じゃあ話しかわつて、煩惱のままに行動するとどうなるか。  
d 苦しい結果が出てくるでしょうね。

仏教では惑↓業↓苦の連鎖が起こると説いています。惑とは煩惱のことです。煩惱が業を引き起こします。そうすると、その報いとして苦しみが結果してくるのです。この場合の業とは悪業のことです。悪行といふ意味です。

m 惑↓業↓苦の連鎖はたどうして起こるのでしょうか。  
d ある人にたいして腹を立てるといふ煩惱(惑)を起こしたとします。起こして、その怒りを行動(業)に移したとします。相手を罵倒したり、時には暴力を振るつたりします。そうするとやつた本人がすでにその時点で、何とも言えない不快感がありますね。

相手をののしつて気持ち悪いことはないし、その後人間関係が悪くなつて不利益をことうむつたり、周囲の信用を落としたり、孤独になつたりして、自分自身をみじめにしつて

**【 電話相談室 】**  
(秘密厳守・匿名可・無料)  
(時間)  
午前8時より午後10時まで  
(電話)  
**0798-41-5346**  
(相談内容)  
人生上のいろいろな悩み・  
信仰上の相談・仏事の相談  
\*相談員が留守のときがありますので予めご承知ください。

しまいます。

**m** そういふ苦が結果するので、  
はないでしょうか。もちろん  
相手も傷つきませうけどね。

**m** 苦が結果したらどうなる  
のですか。

**d** 煩惱に従って行動した報  
いとしての苦が結果したのだ  
から、それを受けていかねば  
ならないのだと思います。

**m** 煩惱を除くことは出来な  
いのでしょうか。

**d** 出来ないわけではありま  
せん。

**m** どうしたら出来ますか。  
たとえばテラバーダの  
仏教では、煩惱の完全なる浄  
化を目指していますから、出  
家して僧院に入り、修行三昧  
の生活をしていけば煩惱がコ  
ントロールされるばかりか、  
ついには阿羅漢といつて、煩  
悩を完全に克服した人になる  
ことも出来るそうです。

**m** もちろん私が実際に行つた  
わけではありませんが、その  
ように聞いています。

**m** お話をうかがっています  
と、内観療法もテラバーダ  
の修行も私のような者にはと  
ても出来そうにありません。  
私のように意志も弱く、すぐ  
に煩惱に流されやすい者には  
道はないのでしょうか。

**d** というか。

**m** ええ、このまま煩惱に振  
り回されてしまう自分には耐  
えられないし、かといつて厳  
しい修行によつて煩惱を克服  
する道に入る勇氣もありませ  
ん。私のような者はどうにも  
ならないのでしょうか。

**d** そんなことはありません。

**m** それはそうと、dさんは、  
煩惱が起きたら、その煩惱を  
どうしていますか。

**d** どうもしません。

**m** 煩惱が出たら出たままと  
いうことですか。

**d** ええ、煩惱を止めたいと  
思つても、先に煩惱の方が出  
てしまいますから、どうにも  
仕方ありませんね。

**m** じゃあ煩惱のままに行動  
してしまふことがあるのです  
か。

**d** はずかしながらそういう  
ことがありますね。

**m** じゃあ私と変わらないで  
すね。

**d** ええそうだと思います。  
m じゃあdさんは煩惱の始  
末がつかない自分を嘆いたり、  
苦しんだりしませんか。  
d しなくはないですし、煩  
悩が起るのには悲しいことで  
す。けどもそれ以上に、阿弥  
陀様の大悲が思われ、また有  
り難さや喜びも起つてきま  
すので、自分の生活や人生に  
不満はありません。なんとい  
うか満足感がずいぶん大き  
いですね。

**m** 先ほど、人生に不足不満  
があると、煩惱に狂わされて  
行動しかなないと言われまし  
たが、人生に有り難さや満足  
感があると、煩惱が起つて  
も邪悪な行動に走ることにブ  
レーキがかかるのですか。

**d** ブレーキがかかりやすい  
と思つています。

**d** だからといって、絶対に大  
それだ悪はしないなどという  
保証は一生ありません。煩惱  
に狂わされて何をしでかすか  
分らない、危険な我が身で

あることは知らされています。  
何時までたつても煩惱の盛ん  
な危ない存在が私なのです。

**m** 阿弥陀仏の慈悲心にふれ  
るとどうなるのか。もう少し  
話してください。

**d** 広大なお徳を頂くのです  
が、善悪の点で言いますと、  
やはり悪を慎み善を行いたい  
という思いが湧いてくるのは、  
この仏の功徳のお働きと思  
います。お経に「この光に遇  
えば、歓喜踊躍し善心を生ず」  
とあります。仏心にふれれ  
ば、それによつて心に善心が  
生まれるというのには、本當だ  
と思ひます。

**m** では、仏の光に遇えば自  
分の行動が常に良くコントロ  
ールされるのですか。

**d** いつもその様であればい  
いのですが、凡夫はそれほど  
闇の浅い存在ではないと思  
います。仏の光が私の行動をコ  
ントロールする功徳となつて  
下さることは重々ありまして  
も、何しろもともと煩惱の深  
い身ですから、このブレーキ  
がきかなくて暴走してしま  
うことが無いとは決して言  
えないですね。親鸞聖人は「さ  
るべき業縁のもよおせばいかな  
るふるまいもすべし」と申さ  
れています。

**m** お見受けしますと修行し  
ておられる風もありませんし、  
またご自身煩惱を除こうとも  
しないとの事、一体私とどこ  
が違うのですか。

**d** ただ阿弥陀仏の名を聞く  
事だけで、それだけです。  
**m** 煩惱があり煩惱にうなが  
されての行動をしかねないけ

れども、仏の名を聞くことで、  
自分の人生に充足を与えられ  
て、不足不満はないといわれ  
るのですか。

**d** ええおつしやる通りです。

**m** 仏の名を聞くというのは  
難しいことですか。

**d** いいえ、口にただナムア  
ミダブツと発音し、その声を  
聞いているだけの、極めて単  
純なことですよ。

**m** それだけですか。

**d** 実際それだけです。あ  
えて言えば、南無阿弥陀仏の  
声に阿弥陀仏の深重の慈悲を  
聞いているのです。

**m** 私には良く分かりません。  
d そうだと思ひます。お念  
仏のいわれを聞かないかぎり、  
分からない事柄だと思ひます。

**m** もしあなたが、煩惱だらけ  
の人生でありかつ煩惱をどう  
することもできないという苦  
惱から救われたいのなら、一  
緒にお念仏のいわれを聞いて  
みませんか。

(了)



移し鞍  
(C)SHOGAKUKAN INC.

# 真宗聖典講座

念仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なりと云々（歎異鈔第七章）

## 〈歎異鈔第七章第一講〉

（現代語訳……阿弥陀仏の本願を信じて念仏する人は、何ものにもさえられることなく、生と死を超え、唯一の大道を往くものです。）

なぜならば、阿弥陀仏のみ名を称えつつ生きる信心の行者に対して、天地の善神たちは尊敬し、信伏していきます。人の心を乱し、さとりをさまたげをなすという悪魔も、仏教以外の宗教も、念仏者をさまたげ、まどわすことはできません。また念仏は、どんな罪悪もさわりも転じていく徳をもっていますから、過去に犯したどんな罪業も、その報いを受けさせることができないし、どのような自力の善も念仏にまさることはないからですと、仰せられました。

「念仏者は、無碍の一道なり」の「念仏者は」をどう読むかはずつと問題にされてきました。すなわち「念仏は――者は（は）」と漢文では読む――無碍の一道なりか、「念仏（する）者は無碍の一道なり」か、どちらにも読めるためです。

今ここでは、「念仏者は無碍の一道を往くものなり」と、文法的には言うべきところを「無碍の一道なり」と省略的に表現することによって、「念仏は人に現れて道となる」という深い意を表現されたものと、私なりに受け取っております。

さて、曇鸞大師の『浄土論註』に「経にのたまはく、十方の無礙人、一道より生死を出づ」と。一道とは一無礙道なり。無礙とは、いわく、生死すなはちこれ涅槃と知るなり。かくのごとき等の入不二の法門は、無礙の相なり。」

（口語訳……華嚴経にいわく「十方の無礙人は、一道から生死を解脱せられた」と。無碍人とは無礙道をさとする人で、すなわち仏である。十方の諸仏はあの道、この道というように、雑多な道からさとりを開かれたのではない。ただ一つの無礙道によって仏となられたのである。さて、無碍とは何であるかと言え、生死がそのまま涅槃であると知ることである。生死と涅槃（さと）りが二つ別れたものではなくて一体不二である。そのようなさとって仏になる法門が、無礙のすがたである。）

とあります。なお、無礙は無碍と同じ意味です。無礙人とは、一切のさわりをはなれた、すなわち完全な自由を得た仏をいいます。仏たちは、「生死がそのまま涅槃のさとりである」と、完全にさとって仏に成られたといわれています。

本願を信じ念仏を申す、そういう念仏者はもちろん仏ではありません。どこまでも煩惱具足の凡夫です。けれども、いただいた信心の智慧は、仏陀よりたまわった智慧であつて、無碍を本質としています。だから、仏陀のような完全な自由（無碍）を得ているわけではないが、完全な自由への道の途上にある者として、自由の風光にふれているといえましょう。

仏教では生と死を分離して見るのを迷いとし、生死を一如平等と見るのをさと（涅槃）としています。無碍の智慧は、生にも死にもとらわれない自由の境地を実現するといわれています。

一方、私たち凡夫は生と死を分断し、生を愛し死を憎むという煩惱で生きています。こういう見方から人生の一切を考えています。ここからあらゆる人生上のさわりが起こってきます。

さわりというものは、（あんなつては困る）（こうなつては困る）というような、人生生活上の邪魔ものということでしょう。それらは、死であり、病氣であり、貧乏であり、社会的地位の失墜であり、孤独で世話をしてくれる人が周りにいなくなる等等、いろいろあります。それらのさわりを推しつめていけば、生の安全を確保したい、生き延びたい、といういわば「生を愛好し、死を忌避したい」という煩惱を根としているのであります。

生きるに都合の良いことを迎え入れ、生きるに都合の悪いことを排除しようとする、そういう生き方をしている、さまざまなのが「さわり」となります。なぜなら、この世は無常転変の世であつて、都合の悪いことはいくらでもやつてきます。その度に、思い煩い、怒り腹立ち、不安にさらされます。しかも、凡夫はどこまでも「生を愛し死を憎む」煩惱から離れられないのです。それゆえ、煩悩みや不安、焦燥や怒りがついてまわります。

こういう煩悩の人生であり、さわりだらけの人生でしか生きていけない私たちですが、浄土から南無阿弥陀仏となつて「我が浄土に來たれ」と喚びかけ、人生の方向を転換させてくださる一条の光がまします。それがお念仏の道です。

念仏は、「汝、煩悩に痛めつけられている者よ、我が阿弥陀のなさけによつて浄土に生まれさせる故、浄土に生まれることが出来ると安心してよい。喜んでよい。これだけは間違いないぞ」と喚びかけます。阿弥陀仏の大悲の誓いであり、生まれて死ぬる」としか思えず、さまざまに想念に縛られた私たちに、「浄土に生まれさせる。その証拠が南無阿弥陀仏であるぞ」とはからずも仰せ下さる仏陀のみ言葉に信順するとき、我が人生は「生まれて死ぬるのではない。阿弥陀の大悲のご恩によつて、浄土へと生まれ往く人生であつた」という視野が開けてきます。

そうすると、あれも邪魔これも邪魔、あんなつては困る、こうなつては困ると、思い煩い、さわりだらけの人生に、「死ぬるときがくれば参らせていただきます」というほのかながらも確かな（開け）をたまるのです。

そこに、大難小難の絶えない人生が、それを忌み嫌うだけの生活ではなく、これも念仏のご縁、これも仏恩を知らせていただくご縁であつたと、大難小難を受容させていただく道をたまるのです。

「あんなつては困る」「こうなつては困る」というさわりだらけの人生生活の上に、いわば「どうなつてもよい」とさえ言うことが可能な無碍の一道をたまるのです。

# 楽心院大量師の言葉

『我らはこの世を夢と知っても、この心が夢と  
いうことを知らぬ。』

聞いて堅めにかかるから、お喚び声が聞こえ  
て下さらぬ。』 (楽心院大量師の言葉)

楽心院大量師は江戸末期の大谷派の名師である。  
滋賀県八幡町の順応寺の住職で、多くの信者を育て  
た方である。道心もあり学問もあつた。いつものお  
話に、「他方の御法を聞く心得は、親縁」ということを  
忘るると益がない。嘆きに沈んで広大不思議のお助  
けを聞きもらすことになる」と言われていた。

(以下は、私の説明ないしは領解である。)

「我らはこの世を夢と知」というのは、仏教の  
教えでは、この世は諸行無常で変化して止まず、そ  
れゆえ空であつて実体がない。あたかも夢や幻のご  
とく、頼りにも当てにもならぬ世界である、とこの  
ように説かれていた。世の中のもののはなべて、表か  
ら見ると形があり、確かな何かがあるように思うが、  
その実、つかんでみれば空虚である。いわば虚仮で  
ある。それゆえこの世のものを当てにせず、(阿弥陀  
仏をたのめ)と仰せられる。

そのように仏法を聞くのであり、聞きつけていく。  
仏法聴聞を重ねていく。世間の虚仮なることも了解  
されてくる。それと共に、自分の煩惱のしづとさや、  
深さも知れてくる。愚かさも知られてくる。どうに  
もならぬ自分であるとも知られてくる。

しかし、世間をそうと知り、自分をそうと知る、  
その知る心は「しつかりしている」「確かである」と  
思っている。教えを聞く心は(まこと)であると思  
っている。「知る心」「聞く心」は夢でも幻でもない、  
まことがあると思っている。

しかるに、楽心院大量師は「(我らは)この心が夢  
ということを知らぬ」と仰せになる。これは非常に

徹底した言葉である。

聞く心も畢竟夢のごとく、幻のごとく、当て頼り  
にならぬものであるとは、なかなか実感的に知られ  
ない。だから「聞いて堅めにかかる」のである。聞  
く心を信頼しているから、この心に仏法を聞かせよ  
うとする。仏法を聞いて聞いて、聞き固めて、ゆる  
がぬものにしようと、いつの間にかしている。仏法  
をしつかり聞いた心を信心であるかのごとくに錯覚  
することさえある。

実は仏法を聞く心がまた夢のごとく幻のごとし。  
仏法聞いて了解した心が夢のごとし幻のごとし。仏  
法知った心が夢のごとし幻のごとし。

世間も夢のごとく当てにならねば、仏法聞いた心  
も当てにならぬ。この世と私の一切合切が当てにも  
頼みにもならぬ。

仏法は聞いた心にあるのではない。お聞かせ下さ  
る仰せが仏法である。仏法聞いた後の心はカスであ  
る。聞こえつつある仏のみ言葉が仏法である。南無  
阿弥陀仏が仏法である。先人の曰く「仰せが仏法な  
り、聞いた心が仏法ではない」とはこの事である。

この心を確かなもの、信頼できると思い誤るゆえ、  
この心に仏法を聞かせにかかり、聞いて堅めようと  
はからうのである。それは、この心にだまされてい  
るのである。

「助けるぞ。たのめ」の如来の仰せがまこと、「我  
が名を称えよ」の仰せがまことである。

聞き心を当てにせず、仰せ下さる大悲のみ心をう  
ち仰ぐばかりである。(了)